公益財団法人庭野平和財団

理事長　庭野 浩士 様

活動助成報告書

コード番号：　13-A-201

被助成者：　公益財団法人日本ＹＷＣＡ
代表　　西原美香子

申請事業の名称：　女性のエンパワーメントプロジェクト
「Through the eye of women」

助成金額：　￥200,000

被災者支援活動報告書

女性団体である日本YWCAは、2011年3月11日東日本大震災直後、海外からの支援も得て、ボランティア派遣、被災地でのボランティア・コーディネート、保育園等への飲用水・ミルクなどの物資提供をはじめとする緊急支援活動を行った。2013年4月からは、中長期支援として、女性と子どもの安全で安心のために、震災時に生まれた子どもたちが20歳になるまで寄り添っていくことを決意し、com7300委員会を設置して（com=ラテン語で“ともに”7300=365日×20年）、特に東京電力福島第一原子力発電所事故による被災者を対象としたプログラムを実施している。

活動の目的

東京電力福島第一原発事故による被災者は、健康に大きな影響を及ぼす「放射能」のリスクに対し、日々不安な生活を送っている。一時的に県外に避難した母子でも、経済的困窮、自立生活の困難により、子どもの健康被害を気にしながらも、福島に戻ることを余儀なくされ、家庭内における母として、妻としてという役割の重責を果たす一方、一人の女性としての個人の権利を優先できない状況が増加しており、家庭内不和、離婚、DVなど女性が受けるダメージは大きい。放射能への関心の深浅、道路一本の隔たりで変わってくる補助金の格差、農産物の生産者と消費者の意見の相違など、小さなコミュニティでさえも偏見や差別が起こり、その結果「分断」が生じている。人々はやがて「自分の意見」を言わないことが賢明と判断し、他の人への接点を持たなくなってきている一方で、地域や家族の繋がりを強調する「絆」という言葉が前面に出され、メディアを通して「復興の兆し」を印象づけている。

このような状況下で、女性団体である日本YWCAは何をすべきかを考え、それは地域に住まう女性たちが日常生活における不安やストレスを解消し、分断され、孤立していく一人ひとりを繋ぎ、エンパワメントすることだと確信している。

日本YWCAは、福島市内にYWCA活動スペース「カーロふくしま」を開設し、2012年10月より運営を始めた。2012年スタート時は、大阪府豊中市からの助成金による3名の地元女性のインターン雇用研修プログラムを実施した。翌2013年5月には新規雇用として1名のパート職員を雇用し、3名の元インターンがボランティアとし、新たな活動の担い手となっている。

地域の女性が求めていることは、人々と繋がりを感じること、正しい情報、そしてそれぞれの悩みや苦しみを家庭や職場ではない場所で「分かち合う」ことである。日本YWCAは小さいながらもそれらの思いが実現する1つの場所として「カーロふくしま」の運営を続け、それぞれの活動を支えていきたいと考えている。

活動方法

豊中市の助成によるインターンとなった3名のボランティア、職員、福島YWCAのメンバー、そして地域で活動している女性団体の協力によって「カーロ運営チーム」をつくり、女性の視点から考える日常の不安やストレス解消につながるプログラムをKJ法で立案するところから始めた。「心を癒されたい」という多くの希望から、ハンドマッサージ、アロマテラピーなどの講座を実施した。広報力は限られていながらも広がりを見せていった。その後、広報として、紙媒体のチラシ作成、Facebookやホームページなど、インターネットを活用した情報の配信を確立している。

活動内容

フェーズ1　（2013年5月～10月）

「カーロふくしま」を一人でも多くの地域住民への認知度を上げる。

これまで行ったイベントとして

・遠方から仕入れた野菜の販売

・アロマテラピー教室

・ハンドマッサージ教室
・放射能学習会
・数名のセラピスト協働によるリラクゼーション
・他NPO協働プログラム（地元農家を招いての勉強会）
・他NPO団体による外国人移住者のための日本語サロン
・子どものための工作教室
・日本YWCA保養プログラム参加者のリユニオンの会
・日本YWCAセカンドハウスプログラム説明会
・男女共同参画主催イベント
・カフェ講座
・チョークアート講座
・元気・素敵になるメイク講座

活動の実施経過

フェーズ2　（2013年11月1日～）

（庭野平和財団助成金はフェーズ2初期段階プログラムの一部に充てられる）

地域女性のエンパワメント、職業への意識と理解、生活向上を目的としたプログラムを企画。

講座は全てプロフェッショナルとして活躍している人々が講師である。講師選出については

1）地域出身・生活を送っている人

2）被災者支援事業に関わったことのある人

の2点に留意。職業人としての意識よりも、受益者に「寄り添える」感覚を持つ人にお願いした。また、講師料に関しては、本来其々が得るべき金額よりも低額で考慮していただき、受益者（講座参加者）からの参加費を全て講師にお渡しする、日本YWCAとしては利益を得ない形をとった。

庭野平和財団助成金対象プログラム（講座）は以下の通り。

タイトル：マクロビ・こどものための食育講座				講師	奈良輪　美香
実施日	2013年11月21日	参加者数	9名	内容	食育イベント

目的

1. 添加物を使用せず、自然の食材の風味を生かし、日常体内に溜まりつつある老廃物、（農産物から摂取している放射能）などを体外に排出する食品・食生活を考える。施設上調理加工は出来ないが、講師による調理品を食しながら、素材の味、添加物の無用性を理解することが出来る。

成果

経済的に転居できない、県外の野菜は高くて買えない、などの悩みを持つ人々にとって、限られた生活の中で工夫することの重要性と共に、食材によって体力・抵抗力を上げることが出来ることを学ぶことができた。

参加者の声

「お茶一杯飲むにも体調によって味が違うのだと聞いて驚いた。明日から生活を考えようと思う」

「ごぼうのスペアリブなんて、ちょっと？と思ったけど、とても美味しい。調理法でいくらでも美味しくなると実感した。」

「こどもの健康を考えると、出来るだけ地域の野菜は取りたくない。けれど経済的に仕方ない。ここで学んだ調理法は、そんな思いも少しだけ決解できるような、そんな講座だった」

マクロビ講座

タイトル：癒しのイベントリラクゼ@カーロ				講師	甲斐章子・菅野千絵 佐々木玖美・高橋美樹
実施日	2013 年 11 月 28 日	参加者数	13 名	内容	癒しのプログラム

目的

1. 家庭の中で大きな役割を担う女性が家事・育児からの解放され、女性だけで楽しむひと時を提供。
2. スキルがある女性が互いに手技・知識を交換することで、相互にエンパワーすることが出来る。

成果

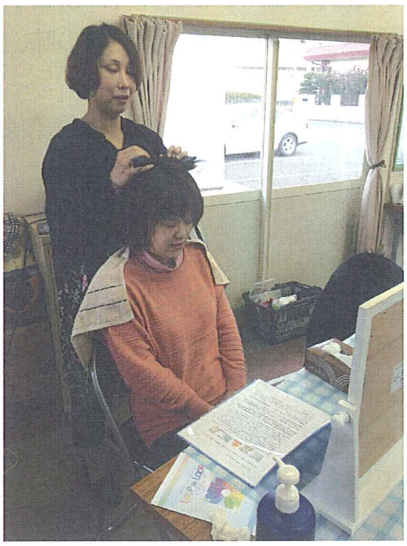
1. 資格を持っていても実践の場所や機会がなかった女性たちが互いに施術しあうことで、自信につながった。受け手となった人からは、「私もやってみよう」という声が上がった。
2. 一人ひとりが楽しいひと時を過ごし、「ここに来れば日常の悩みから一瞬解放される」という機会を得ることができた。

参加者の声

「初めて参加して、最初は緊張していましたが、施術を受け色々な話ができて、いつの間にか打ち解けていました」

「とても和やかな時間で、安い値段で色々参加できて良かったです」

「私も何か手技を得て、次は自分が癒してあげたいと思った」



タイトル：ハンドメイドサロン@カーロ				講師	石井美幸
実施日	2013年12月3日	参加者数	20名	内容	裁縫・仲間づくり

目的

1. 裁縫をしながら色々な話をすることで、日常から離れた「個」の時間を大切にする。
2. 知らない人と同じ物を作る作業を共有し、それぞれの個性を活かした作品を作り上げる。
3. 新しい創作グループを作る第一歩の機会を持つ。

成果

初めての人も多く訪れ、参加者年齢も20代から70代までと世代の幅も広がった。お互いに初対面ながらも、世代間に気兼ねなく、地域の話、食の話などをしながら創作のひと時を楽しむことが出来た。

参加者の声

「布ナプキンに興味があったけれど、買うととても高いのです。自分で作れるなんて嬉しい」

「裁縫って、時間を忘れるのです。集中してひとつのものを作るっていう時間、なかなか取れない。無料でこういう時間がとれて、気持ちがほっこりする」

「自分は息子しかいないけれど、こうして若い女性と話す機会って楽しいわね」

タイトル：セルフジェルネイル講習会				講師	阿部由美子
実施日	2013年12月5日	参加者数	4名	内容	大人女子カフェ@カーロ

目的

1. 震災後遠ざかってしまった「自分をきれいに見せる」ことを自ら取戻し、生活をいきいきと過ごすことができる。

成果

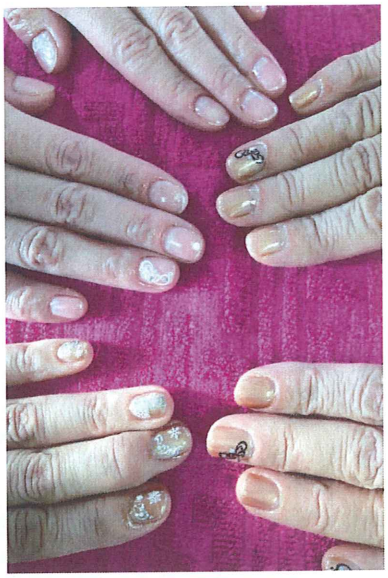
4名と少ない人数であったが、講師の指導が一人ひとりに行き渡り大変充実した講座となった。

参加者の声

「はじめてネイルをした。爪に色を入れるだけで気持ちがわくわくする」

「こんなに簡単に出来るならもっと早くやってみれば良かった。抵抗があって出来なかったけどなんだか色々試してみたい」

「出来るなら先生の資格が取りたい」



タイトル：クリスマスパーティー@カーロ				講師	なし
実施日	2013年12月24日	参加者数	23名	内容	リユニオン・集会

目的

1. YWCAの被災者支援事業である保養プログラムとセカンドハウスプログラムの参加者がクリスマス会を通して集まり、互いの近況報告をする
2. 参加費を古着にし、それぞれが物を持ち寄り交換し合い、無駄のないリサイクルをする
3. 子どもたちのために楽しいひと時を提供する

成果

こどもたちも楽しく参加することが出来、ゲームを楽しみ新しい友達との関わりが出来た。
地域にこのような場所があるという事を知り、「また来たい」という声が出た。

参加者の声

「私は震災離婚で、ウィークデーの昼は仕事をしています。こういう場所があるならもっと来たい。キリスト教基盤の団体には、避難していた時にもお世話になりました。だからYWCAの活動にも信頼を寄せてきました」

「私は南相馬から引っ越してきました。でも、今住んでいる地域では、日頃の心配を語ることが出来ず、結局こどもも私も疎外感を感じています。ここに来ればこれだけ気兼ねせず、いろいろ話が出来る。良い場所を見つけた感じです」

「ビンゴゲームがたのしかった」

クリスマスパーティー@カーロ

タイトル：ジェンダーカフェ@カーロ				講師	佐々木三千代
実施日	2014年1月31日	参加者数	13名	内容	ジェンダーとは何か

目的

1. ジェンダーとは何か。まだまだ言葉としても認識としても浸透していない「ジェンダー」を一人ひとりの生活を振り返りながら学ぶ。
2. 「男」「女」社会の中の「規制」にとらわれる生活を開放する意識を持つ。

成果

日頃抱える生活の中の「役割分担」は、社会規範の中で作られたものに過ぎない。固定概念を取り払う事によって、「生きづらさ」や「～でなければならない」ということは自分で壊すことができることを知ることができた。

男性参加者が入ったことで、互いの価値観を共有し、活発なワークショップができた。

参加者の声

「ジェンダーという言葉がなんだかわからず来たけれど、ああ、これが！ということが沢山あって楽しかった」

「女は損と思っていたことが沢山あったけど、女じゃなければできないと改めて知ると得した気分」

「男で良かったと思うし、女になりたいと思ったことはないけれど、今日のワークで嫁さんを大事にしようと思った」

タイトル：こころとからだの相談会				講師	久宗百合子
実施日	2014年2月23日	参加者数	20名	内容	テルミーでの体ほぐし

目的

1．テルミー（灸の一種）で日頃の緊張感や疲れをいやすこと。

2．気持ちをリラックスさせて、日頃考えていることを話すことで、笑顔になって帰ること。

参加者の声

気持ちをリラックスできたので、日頃の不安に感じていることを素直に話すことができました。

・甲状腺検査のこと
・放射線量のこと
・食の安全のこと
・福島原発のこと
・補償金のこと

タイトル：チョークアート				講師	柏木亜希
実施日	2014年3月4日	参加者数	9名	内容	アートプログラム

目的

1. 集中して作品を仕上げることで、日々の生活の中で感じている放射能への不安、将来への不安などから一時離れることができる。
2. 自営業の人たちの「看板」となるものを作成することによって、事業を盛り上げ、さらに仕事にまい進することができる。
3. 「興味」から「得意」への第一歩を踏むことができる。

参加者の声

「それぞれの個性が出てとても良いクラスでした」

「集中して物を作ることで、日頃の悩みも忘れることが出来るので、こういったクラスは良い」

「ピアサポートの受講者がこのクラスに興味を持っていた。僕がくれば彼女もきやすいと思ったが、来ることが出来ず残念。次回は是非このクラスの楽しさを伝えて、参加させたい」

タイトル：大人女子会　美塾				講師	齋藤友快
実施日	2014年3月7日	参加者数	12名	内容	自分を好きになれるメイク

目的

1. 震災以後、生活の中での悩みや苦しみ、子育ての不安などと向き合う女性たちは、親として、妻としての行動を通し、時に自分を否定することも多い。メイクをすることによって女性は元気になり、自分を好きになることができることを伝え、生活の中で実践してもらう。

成果

この度2回目となった美塾プログラムは相変わらず好評で、写真に写る女性たちは日頃の自分とは違う自分を見ることができた。講師である齋藤先生の安定した講座は人気があり、受講者の中には自ら講師になることも考え、養成講座受講を考える人もいた。

参加者の声

「メイクに対する根本的な考えを変えることができ、自然にできる内容を教われて良かった」

「次回があったらまた是非参加したい」

タイトル：ハンドメイドカフェ				講師	菅野千絵
実施日	2014年3月11日	参加者数	13名	内容	手作りを楽しむ

目的

1. 手を動かしながら物を製作するという時間は、日常の中で極めて貴重である。製作に集中し、他愛のない話をしながら、時間を過ごすという事によって、日頃のさまざまな悩みから解放される。

成果

新しい参加者もあったが、皆が和気あいあいと時間を過ごすことができた。

一方、震災からちょうど3年を迎えた日でもあり、作業を止め、地震が起きた時間2時46分に黙とうをささげた。

参加者の声

「子どもを連れてきても楽しく過ごせる時間でした」

「今日で2回目のカーロでの講座です。違う世代の人と話が出来てとても楽しいです」

ハンドメイドカフェ

タイトル：防災講座				講師	池上三喜子（東京防災研究所）
実施日	2014年4月12日	参加者数	17名	内容	もしもの時に役立つ防災講座

目的　災害直後には、限られたライフラインで如何に知識を実践できるかが問われる。この講座では老若男女を対象に、生活の中にあるものを用いて知識と実践を通して防災を学ぶ。

成果　災害経験を経て、日頃からの災害への備えの重要性が再確認された。また、楽しく実践・学びができたので、家でもやってみようという気持ちになった。近隣の町内会の方々の参加で、地域での防災についての話題まで広がるとともに、「カロふくしま」の認知度があがった。

参加者の声

・卓上コンロでおいしいご飯が炊けるなんて驚きました。おこげまでいただけて感激です。

・日頃の備えの大切さを身に染みて感じています。帰ってすぐにやってみたいと思います。そして、必要なものは手の届くところに準備をしておきたいと思いました。

・ビールの空き缶、サラダ油、アルミホイル、ティッシュという身近な素材でコンロやランプができて、すごいですね。

活動の成果

活動の成果に関しては、個々のプログラム報告に記載した通りだが、全体を通し、多くの参加者がそれぞれの安らぎと楽しみを求めて「カーロふくしま」を訪れていることがわかる。被災地に向けた支援の形は様々であるが、このような「集える・分かち合える・同じ時間を共有する」ことの出来る場所は、実際には、それほど多くはない。2013年4月から2014年3月までに「カーロふくしま」を訪れた人数はのべ1,100名であり、この数は特筆すべき数である。これまでにYWCAの存在を知らなかった人々が大多数である。YWCAの所有する「カーロふくしま」はそれ自体の存在を通して、YWCAが20年間被災者に寄り添って支援を続けていくことを目標に実施している保養やセカンドハウスプログラムなどの被災者支援活動について、多くの人々に知ってもらう良い場所となっている。それは、それぞれのプログラムの参加者増で評価される。さまざまなプログラム体験を通して、個々が意欲を持って「昨日より良い」とする日々を作り出すことへの支援をこれからも大切にしていきたい。

今後の課題

「おしゃべり」をしながら作業をするという時間を多くつくってきたが、これは果たして「支援」になるのか、という意見もあるかもしれない。これまで支援を続けてきた中で感じていることは、「コミュニティの分断」が加速しているということである。「福島は安全」「これからは復興だ」という政府やマスコミの広報が大きくなる一方で、子どもを持つ母親は、不安が増大するにもかかわらず、「人と話をしない」ことを選択する人々が増えている。地元の食品の摂取への是非、福島に住み続けることの是非など、さまざまな考えの相違によって、人々は会話で傷つけ合うことを避け、「孤立が得策」と考えている人もいる。このような状況の中で、いかにしたら「コミュニティ再生」を促すことができるのか。福島在住ではない人々がどのような支援ができるのか。模索が続いている。

他愛のない分かち合いや、実生活から少し距離のある、「カーロふくしま」に集う人々との時間の共有が、コミュニティを大切に思う気持ちへのリハビリにつながるのではないだろうか。ある参加者に「あなたにとって心のケアとは何か」と聞くと、「同じ福島の人々とおしゃべりをすることです。他愛のない無駄話だっていいんです。県外の講師に、こう考えようとか、こうしてみようとか、お話をされても心のケアにはなりません。」という答えが返ってきた。このヒアリングを通し、実施したこのプログラムの在り方は正しかったのではないかと担当者として評価したい。今後も受益者の声を大切に、どのような形の支援がその時点においてベストなのかを考えていきたい。

2013年4月から2014年3月まで、およそ1,100名の来訪者がカーロふくしまを訪れ、その多くが30代から40代という世代、かつこれまでYWCAを知らなかった人々である。福島には会館やスタッフを持たない福島YWCAが長きにわたって活動を続けてきたが、世代としては50代から80代のシニア層の会員活動であり、長年の間、原発問題にに取り組んできた実績がある。この福島YWCAの会員たちと新たに「カーロふくしま」に集う30代から40代の若い世代をつなげることで、「カーロふくしま」で共有できる場を設けながら、多世代間の連携をはかり、課題解決に向けての歩みが始められるようアプローチしていきたい。

「カーロふくしま」を運営していく上での必要経費は決して安価なものではない。プログラムの更なる充実と実績をもとに、積極的な募金活動とともに助成金の申請も続けていきたい。事業の実態については、多くの人々の意見を聴きながら、常に評価をしていく必要がある。そのためには、組織や関連団体の中だけでなく、社会に向けても提言し、協力を呼びかけていかねばならない。

被災者にとって最も恐れることは、社会から「関心を寄せられなくなる」ことであり、「風化」は被災当事者以外の人々が作り上げるものである。「カーロふくしま」には、声を出して行こう、頑張って前を向いていこうとする人が集い始めている。この場所を適切に運営していく事で、次世代に向けても、課題を提言していける活動をつくっていきたいと考えている。